

広島市安佐地区における『健康相談教室』事業の報告

安佐医師会学校保健委員会委員長

松本 治之

安佐医師会学校保健委員会	伊藤 仁	桑原 正彦	杉野 禮俊
	長尾 史博	満田 廣樹	木ノ原伸久
	中山 純維	中村 文男	原田 昭
	大本 崇	片山 健	國本 優
	新見 直正	村上 朋弘	

安佐医師会

藤井 和夫

安佐学校保健会

横畑 裕之

青野 拓郎

松重 修

升本 正司

安佐学校保健会事務局

岡本 弘文

上向井利之

尾川由美子

I. はじめに

学校保健法は、学校保健安全法へ改正され、平成21年4月より施行された。これにより、総合的な学校安全計画の策定等による学校安全の充実が図られた。また、改正点として、第8条「学校においては、児童生徒等の心身の健康に関し、健康相談を行うものとする。」、第9条「養護教諭その他の職員は、相互に連携して、健康相談又は児童生徒等の健康状態の日常的な観察により、児童生徒等の心身の状況を把握し、健康上の問題があると認めるときは、遅滞なく、当該児童生徒等に対して必要な指導を行うとともに、必要に応じ、その保護者に対して必要な助言を行うものとする。」とあり、学校医の職務が定期健診や就学時健診などの健康管理のみならず、健康相談、保健指導にまで及ぶことも明示されている。さらに、改正点として、地域の医療機関等との連携による児童生徒等の健康管理の充実がある。

最近では子どもたちの疾病の多様化に伴い、児童・生徒や保護者からの健康相談内容が多様化してきている。健康相談内容が、学校医として委嘱されている内科、耳鼻科、眼科の分野だけでなく、整形外科、皮膚科、精神科などの領域まで広がってきている。われわれ広島県安佐医師会では昭和54年から現在まで34年間、年1回、広島市安佐地区（安佐南区・安佐北区）において、内科、耳鼻科、眼科、整形外科、皮膚科、精神科、歯科などの専門医が、児童の健康に関する様々な疑問や不安について相談を受ける「健康教室」を開催している。この事業は、健康相

談であり、保護者への周知を高める目的で、平成24年より事業の名称を「健康教室」から「健康相談教室」と改めた。今回はこの健康相談教室の事業について報告する。

II. 「健康相談教室」について

われわれの安佐医師会は、広島市安佐地区にある。安佐地区とは、広島市の北部に位置する安佐南区、安佐北区の範囲で、広島市の面積の52.0%、人口では32.8%（388,118人）を占める。安佐医師会管内における平成24年5月現在の広島市立小・中・高校の児童生徒数は、小学校53校（児童数24,715名）、中学校24校（生徒数11,638名）、高等学校2校（生徒数1,262名）である。安佐医師会は安佐地区の医師で組織される医師会であり、前述のとおり、広島市立の小・中・高校計79校の学校医を務めている。（平成24年5月現在の所属会員数は571名）。

「健康相談教室」は、安佐医師会より枠を広げた安佐学校保健会（医師・歯科医師・薬剤師・栄養士・学校校長・養護教諭・保健指導教諭等の協力・連携組織）で行っており、広島市安佐地区で小・中学校の保護者と児童・生徒を対象にして、児童・生徒の健康に関する相談を受ける事業である。昭和54年から始まり、当初は「血液検査」、「内科」、「耳鼻咽喉科」、「眼科」、「整形外科」、「皮膚科」、「歯科」、「栄養」、「生活」の各コーナーに分かれて相談を受けていた。昭和60年から「心の相談コーナー」が設けられ、その後、「血液検査」が「内科」に統合され、

「生活」が廃止された。昭和62年からは「環境・薬コーナー」が設けられている。当初は1会場で行っていたが、昭和58年から安佐南区と安佐北区の各区小学校1校ずつ、つまり、2会場で開催するようになり、平成14年からは安佐南区、安佐北区、安佐医師会館の3会場となり、現在までの34年間、毎年1回開催している。平成2年に、当時の安佐医師会学校保健委員会委員であった藤井和夫が、昭和54年の開始時から平成2年までの「健康教室」の相談内容について報告している。今回はこの34年間のうち、平成11年から平成24年までの14年間の相談内容¹⁾について報告するとともに、平成2年に藤井がまとめた昭和54年から平成2年までの12年間のデータとの比較検討を行なった。

Ⅲ. 相談内容とその比較検討

1. 14年間の相談件数

平成11年から平成24年までの14年間の各コーナーでの相談件数は図1のグラフに示す通りである。この14年間を通して最も相談件数の多いのは歯科である。次が内科、3番目が心の相談、4番目が整形外科、その後は、皮膚科、耳鼻科、眼科、栄養、薬・環境の順になっている。

図2は、平成2年に藤井がまとめた昭和54年から平成2年までの各コーナーの相談割合である。今回、我々のデータは件数で表示しているが、平成2年の藤井の発表では、相談数割合(%)で表示されている。従って件数での直接的な比較はできない。昭和54年から平成2年までの12年間のデータでは歯科が

図1 平成11年～平成24年 相談件数

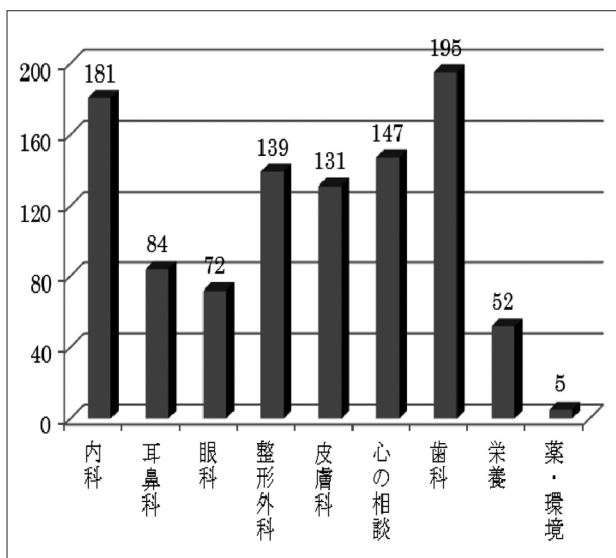
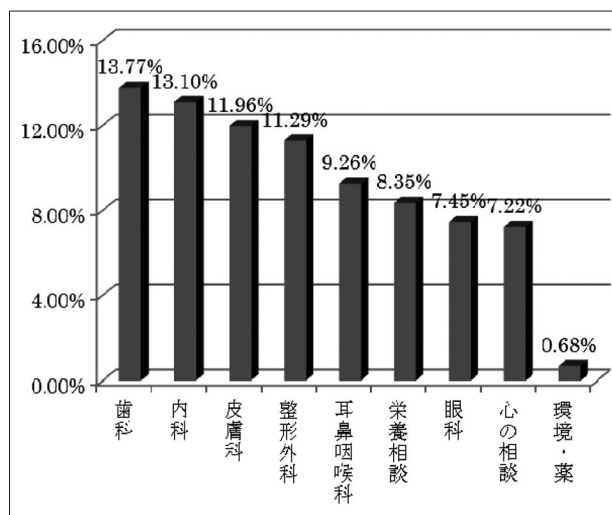


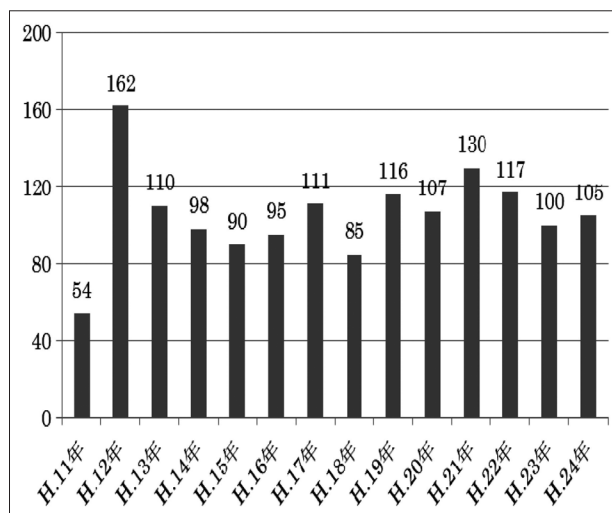
図2 昭和54年～平成2年 相談数割合



最も多く、2番目が内科で3番目が皮膚科、4番目が整形外科となっている。その次は耳鼻科、栄養相談、眼科、心の相談、環境・薬と続いている。歯科が最も多く次に内科が多いのは最近の14年間と変わらない。環境を除いた他のコーナーが昭和54年の開設当初からあるのに比べ、心の相談は昭和60年からの開始であることを考慮すると相談件数が多い。

図3は、この14年間の年度別の相談件数の推移を表している。年度によって相談件数の変動があるが、この原因の1つに開催場所である会場校の立地条件が影響すると考えられる。会場校は、安佐南区と安佐北区の小学校が順番に持ち回りで開催し当番校となるが、交通アクセス等が悪い学校が会場になると相談件数が減少するという傾向が見られる。安佐学校保健会理事会でアクセスの良い場所を選び、毎年同じ場所で開催することについて議論されたが、適切な場所が選定できず、学校において開催すること

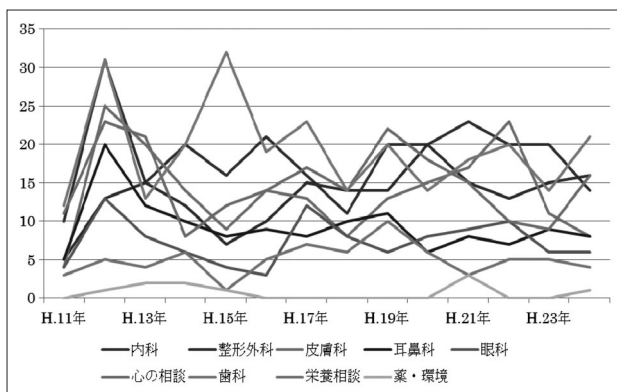
図3 年度別相談件数



に意義があるという意見も出て、当番校での開催という方法が続けられている。

図4はこの14年間の各コーナー別相談件数の推移を表している。平成12年から平成16年までは、平成13年を除き毎年、歯科と内科が1位と2位であったが、平成17年から心の健康が1位か2位に入っている。現在の学校保健の中で心の健康が主要な課題のひとつになっていると考えられる。

図4 コーナー別相談件数推移



2. 各コーナーの相談内容

①歯科

歯科の相談で最も多かったのは歯並びが悪いという相談であった。これは平成2年の報告でも同様であった。今回の調査で次に多かったのは矯正治療に関する相談であった。平成2年の報告の中には矯正治療という内容はなかったが、歯並びや不正咬合の相談の中に含まれていた可能性も考えられる。矯正治療の相談には、費用に関するもの、矯正治療を勧められているが本当に必要なのかというセカンドオピニオンを求めるものが多かった。このような歯科受診時に直接相談しにくい問題を、健康相談教室を利用して相談するという事例が増えているようである。これも学校保健の中で健康相談教室の果たす役割のひとつであると思われる。

②内科 (図5、図6)

内科の相談で顕著に多かったのは背が伸びにくいあるいは成長が遅いのではないかとというものであった。次が喘息、頭痛、腹痛、夜尿、疲れやすい、体重が増えない、朝起きにくい、咳と続いている。過去の藤井の報告では、最も多かったのは腹痛、次が喘息、その後に疲れ、アトピー性皮膚炎、胸痛、朝ねぼうがある。18年前まではほとんど相談のなかった成長に関する相談が、今回は最も多かった。日本

人の体格が向上しているという社会的傾向の中、保護者は自分の子どもの身長や体格に関する不安を感じやすくなっていると考えられる。また、過去の調査では少なかった夜尿が今回は5番目に多く、心の相談の中でも6番目に多い。夜尿を内科の問題とみるか、心の問題とみるか、相談先は保護者の選択により別れるようである。過去に一番多かった腹痛は今回の調査では4番目ではあるが相変わらず多く、疲れや朝起きにくいなどの不定愁訴は現在も過去も同じように多い。喘息の相談は今回も過去も2番目に多いことから、学校保健において相変わらず顕著な内科疾病であると考えられる。

図5 平成11年～平成24年「内科」

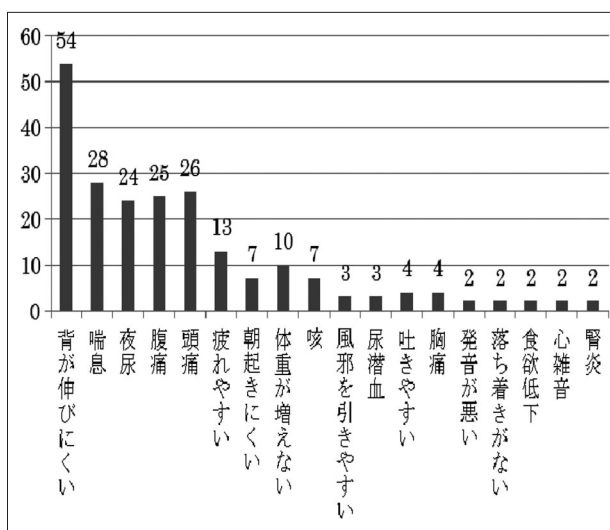
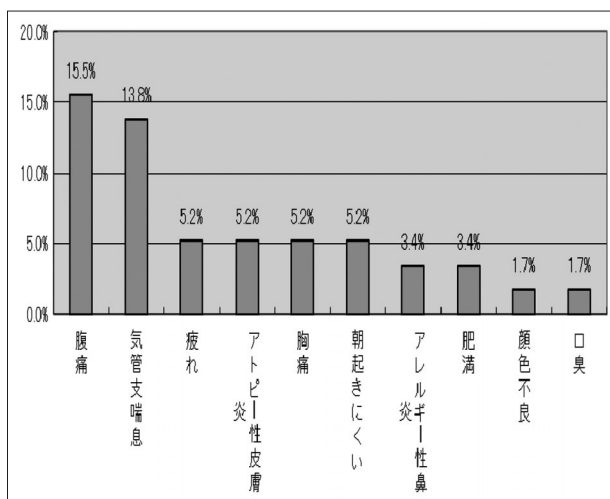


図6 昭和54年～平成2年「内科」



③心の相談 (図7、図8)

今回の調査において、心の相談ではチックに関する相談が最も多かった。18年前の藤井の報告でもチックが最も多く、2番目は「時々、首を振る」という相談になっているが、この中にはチックが多く含ま

れている可能性がある。これらを合わせると、チックの相談が非常に多かったのではないかと推測される。チックは34年前から保護者にとって大きな心配事であることが考えられる。

今回の調査において、次に多かったのは友人関係で、3番目が不登校であった。過去の報告では不登校は5番目の相談件数であり、今回の調査ほど多くはなかった。登校時の腹痛が、内科の相談内容にも挙がっているのが、相談者が内科と心の相談に分かれているのかもしれないが、最近では不登校が増えていると推測される。さらに、今回の調査では「落ち着きがない」「学校を抜け出す」「キレやすい」「行動異常」などの相談がある。これら問題行動の相談は、過去の報告では見られなかった。安佐医師会学校保健会部会研修会や安佐学校保健会総会などでの発達障害に関する講演会の開催による啓発効果も考えられる。このように不登校や問題行動の増加

図7 平成11年～平成24年「心の相談」

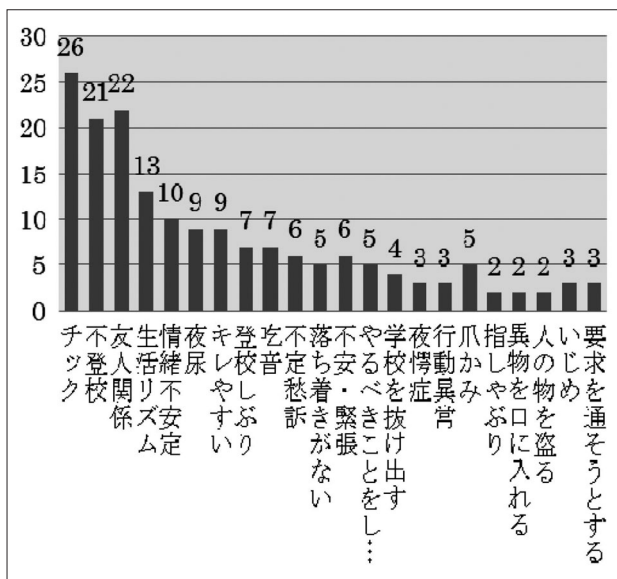
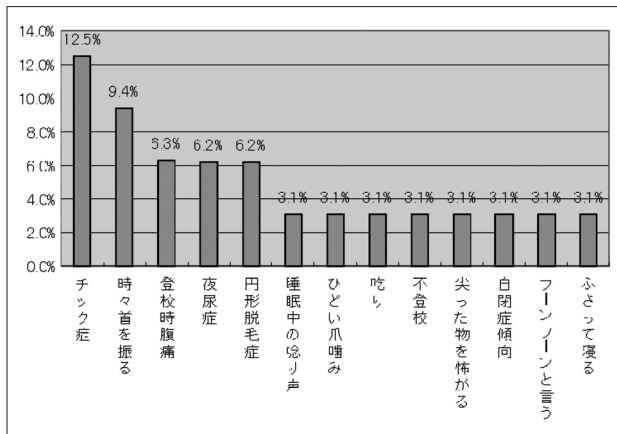


図8 昭和54年～平成2年「心の相談」



に伴い、学校保健における発達障害への対応が注目され、今後の課題となっている。

④皮膚科 (図9、図10)

皮膚科の相談では、今回の調査において、また平成2年の調査報告においても、アトピー性皮膚炎の相談件数が最多である。平成2年の報告では2番目に小児乾燥性湿疹が多かったが、これはアトピー性皮膚炎の軽症状と考えられ、これらを合わせると、平成2年の報告ではアトピーの相談数が非常に多かったと思われる。今回の調査では小児乾燥性湿疹はアトピー性皮膚炎の中に入っている。昭和54年から現在まで、アトピー性皮膚炎は学校保健において大きな課題であると思われる。今回の調査で次に多かったのは、「あざ」や「ほくろ」などの色素性母斑であった。平成2年の報告でも母斑の相談はあったが、今回の調査ほど多くはなかったが、ここ23年間で急

図9 平成11年～平成24年「皮膚科」

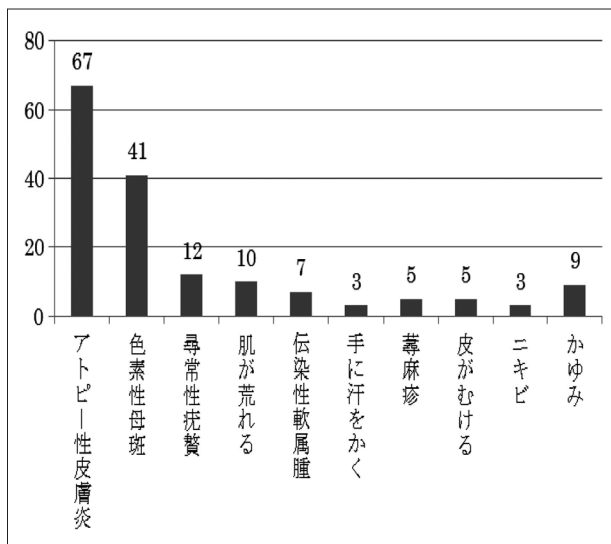
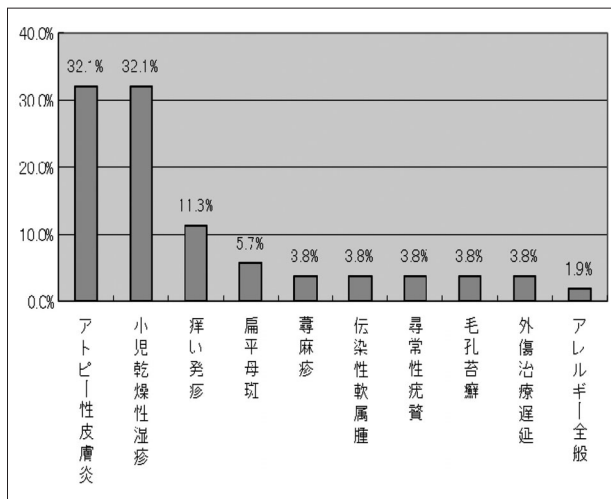


図10 昭和54年～平成2年「皮膚科」



増している。いわゆる「あざ」については美容的な内容が多く、現代社会を反映しているのかもしれない。黒色上皮腫の認識からか、「ほくろ」については悪性にならないか、切除した方が良いかという相談が多かった。

⑤整形外科（図11、図12）

整形外科で最多の相談は、今回の調査でも平成2年の調査どちらも姿勢に関する相談であった。その中には側弯症の疑いのあるものもいくつかはあったようではあるが、最初から側弯症あるいはその疑いがあるとして相談した事例は、前回も今回の調査も「側弯症とその疑い」として別にカウントしている。

今回の調査で2番目に多かったのは、転びやすいという相談で、平成2年の調査では肩こりに関する

図11 平成11年～平成24年「整形外科」

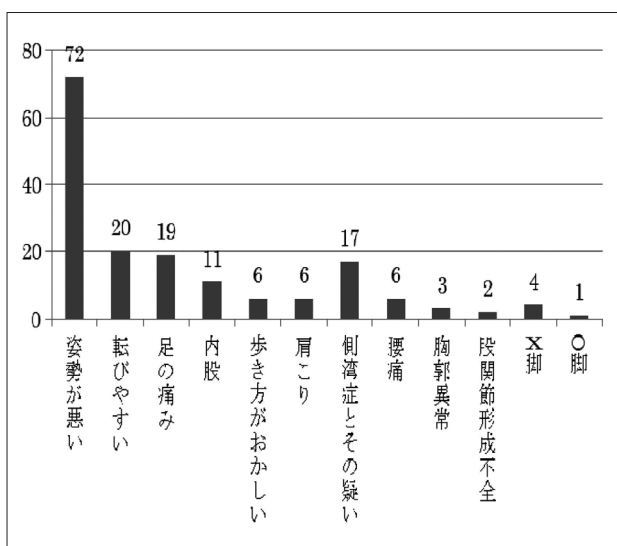
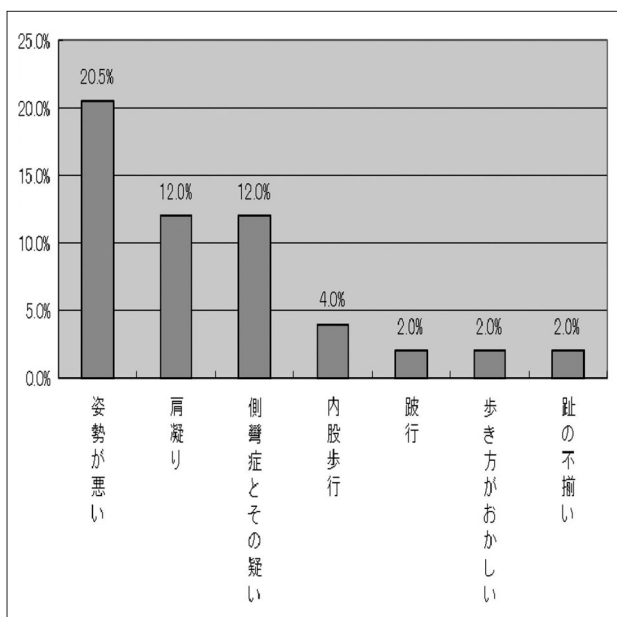


図12 昭和54年～平成2年「整形外科」



相談であった。転びやすいという相談が23年間で増えている。児童の体格は向上しているが、運動能力は必ずしもそれに伴っていないことも考えられるが、発達性協調運動障害によるものが含まれている可能性も否定できない。また、DSM-5の自閉症スペクトル障害の診断基準の中に運動能力障害が新たに加わったので、転びやすいという児童、生徒のなかに発達障害が含まれている可能性もあるのかもしれない。

⑥耳鼻咽喉科（図13、図14）

耳鼻咽喉科では、今回の調査、平成2年の報告共に、アレルギー性鼻炎の相談が最多であった。平成2年の報告では、同様に多いのが鼻閉の相談で、この中にはアレルギー性鼻炎やアデノイドによるものも含まれている可能性が考えられる。今回の調査では、鼻閉の相談でも実質的に内容がアレルギー性鼻炎やアデノイドであれば、そちらの方にカウントし

図13 平成11年～平成24年「耳鼻咽喉科」

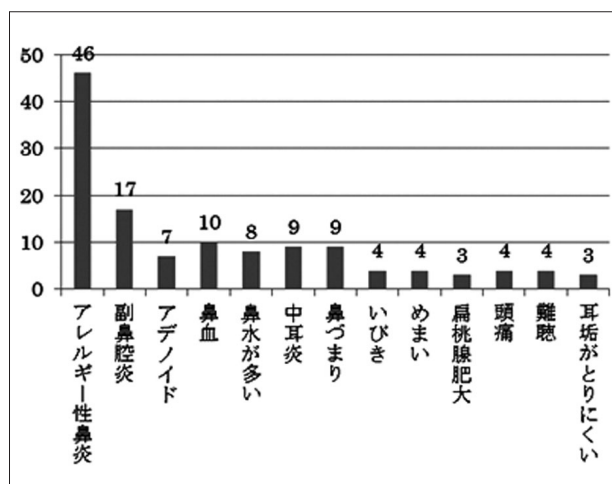
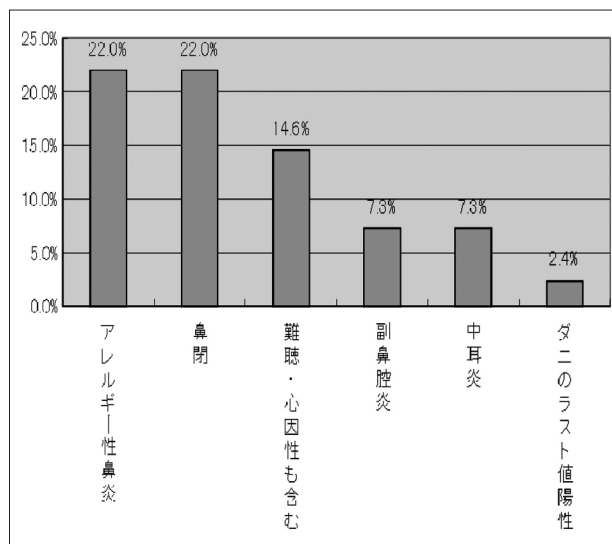


図14 昭和54年～平成2年「耳鼻咽喉科」



ている。そのために今回は鼻閉としての相談件数は減っている。また、今回、耳垢を取るのをいやがって取らせないがどうしたらいいかという相談が数件あったが、これらは、発達障害の知覚過敏によるものを含んでいる可能性も否定できない。

⑦眼科 (図15、図16)

眼科では、今回の調査、平成2年の報告共に、視力低下の相談数が最も多く顕著であった。学校保健において、相変わらず重要な課題であると考えられる。今回の調査で2番目に多かったのは、アレルギー性結膜炎であり、平成2年の報告では3番目の相談件数であった。コンタクトレンズが原因となっているものも含まれている可能性も否定できない。平成2年の報告では、眼鏡に関する相談が2番目に多かったが、今回の調査では2件だけだった。今回の調査で「まばたきが多い」という相談が2件あったが、これはチックの可能性もある。平成2年の報告でもチック症が相談内容として挙げられている。

図15 平成11年～平成24年「眼科」

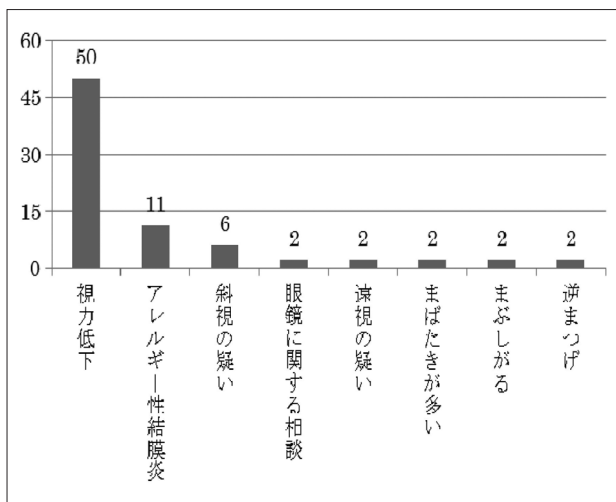
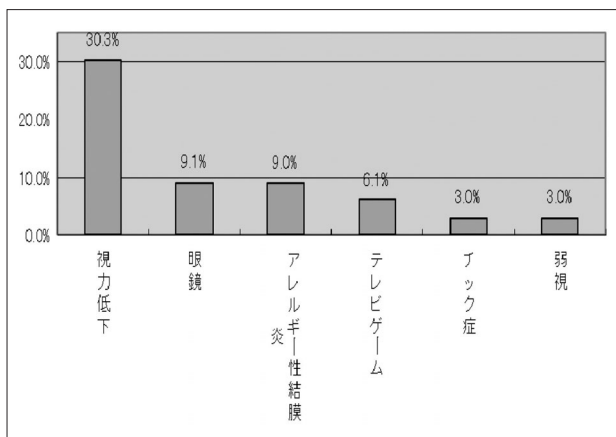


図16 昭和54年～平成2年「眼科」



⑧栄養相談

栄養相談は栄養士が行っている。今回の調査で一番多かったのは肥満の相談であった。平成2年の報告でも肥満が最も多く、肥満への食事指導が求められている。食育基本法が制定され、学校保健の分野でも食育が注目されている中で、今後も相談は増えていくのではないかと予想される。

⑨環境・薬

環境・薬コーナーの相談は薬剤師が行っており、薬の併用についての害や副作用などの相談が行われている。

IV. 健康相談教室に参加した保護者の声

気にしている内容について、しっかりと説明頂きありがとうございました。姿勢の悪さも親子で取り組めるよう説明頂き実践していきたいと思います。成長に関しても食事・睡眠・運動とわかりやすく、がんばろうと思います。お忙しい中ありがとうございました。ゆっくりとお話を聞いていただいて、とてもよかったです。やさしく言葉をかけて頂き、とても気持ちが楽になりました。どこの誰に相談していいのか分からず悩んでいたのが、こういう機会がありとても助かりました。

V. まとめ

この14年間の「健康相談教室」で全コーナーを合わせて最も相談数が多かったのは、整形外科の「姿勢」に関する相談で72件であった。2番目に多かったのはアトピー性皮膚炎67件であった。3番目は歯科の「歯並び」に関する相談で51件、4番目は「視力」に関する相談で50件、5番目がアレルギー性鼻炎で46件、6番目が「あざ」や「ほくろ」の色素母斑の41件、7番目が「夜尿」で内科24件と心の相談9件を合わせて33件、8番目が喘息で28件、9番目がチックおよび頭痛で26件、11番目が腹痛で25件、12番目が友人関係で22件、13番目が不登校で21件だった。

われわれ安佐医師会の「健康相談教室」はアトピーや喘息などの疾患に関するセカンドオピニオンを求めたり、姿勢や歯並び、あざ、ほくろなど治療を要するか否かの判断を求めてくる保護者に、指導・助言を行うという役割も果たしている。保護者は子どもに関して多くの不安や心配を抱える一方で、医

療機関への直接の受診はハードルが高いと感じていることも事実です。そういう意味でもわれわれ安佐医師会の健康相談教室は価値があると考えています。この事業は、平成24年8月に開催された日本医師会学校保健委員会の諮問内容である『これからの学校健診と健康教育』における「今後の健康診断、健康教育への医師会の関わり」「学校保健を推進するための医師会」に繋がるのではないかと考えている。

終わりに、「健康相談教室」にご協力いただいている学校の先生方、安佐医師会の先生方、安佐歯科医師会の先生方、安佐薬剤師会の先生方、栄養士の先生方に深謝いたします。

参考文献

- 1) 松本治之：現場からみた学校保健 大学教育出版；198-203 2013